

伝統的民家の快適性

「風土別伝統民家」

953225 倉本 美紀

指導教員 成田 健一

<目的>

住宅の構造的特徴から寒冷地域・温暖地域に分け、建物の屋根・壁・床の違いを比較し、それぞれの土地の風土に対する特徴を調べた。その結果をふまえ、伝統民家と近代住宅の構造的特徴を比較する。

<寒冷地方の伝統民家の構造特徴>

寒冷地方では積雪地帯が多いため、現在の農業機器に当たる牛や馬を寒さから守るため「曲屋」と呼ばれる畜舎と母屋を結びつけた家が多く見られた。雪の多い養蚕地方では、二階や屋根裏を蚕室として利用する「合掌造」のような大型の多層民家が見られた。また、雪に対処するため屋根の勾配を急にするなどの工夫が見られた。

<温暖地方の伝統民家の構造特徴>

温暖な西南日本では納屋・作業所・畜舎などが別々に建てられている場合がよく見られた。これらはいずれも木造で草葺屋根・瓦屋根が多く、地方によっては入母屋や切妻など屋根の形の共通性が見られる。

<伝統民家と近代住宅の比較>

[伝統民家]

寒冷地方では寒さを防ぎ暖かさを保つため、温暖地方では暑さに対処する事を考え、壁・床・屋根などの材料や構造などに工夫をしていた。佐賀県や長崎県で見られる「くど造」のように独特の形で各地の気候特性などに対処した構造であった。

[近代住宅]

機械や技術が発展し、建物の構造を工夫するだけでなく暖房器具や床暖房で空気を温めたり、冷房器具で空気を冷やしたりし、機械によって寒さや暑さに対処している。各気候特性に対処した「くど造」のような独特の形式を持つ住宅ではなく、機械や技術を用いて各気候にあった住宅になっている。

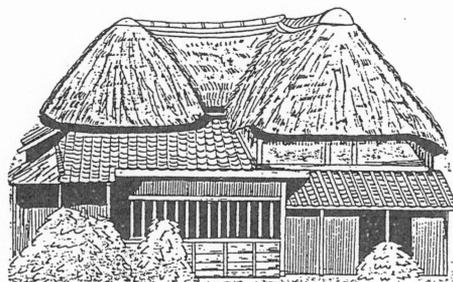
<現在への継承点>

◎昔の竹簀子床で見られた床下空間との空気の循環システムを継承しているものとして、空気清浄、温度・湿度、気流の調節を基本に、外気に比べ夏涼しく、冬暖かい床下空間からの空気をファンなどを使い強制循環させ、換気効率を高めるトータルな空調システムなどを住宅メーカーが使用している。

◎昔の土壁を元に、現在は石膏ボードや吸音材が開発されている。これは、耐火・断熱・遮音面に優れた性能をもっており、現在多くの住宅に使われている。

<まとめ>

現代の住宅は、技術的・デザイン的にも伝統民家に比較すると大きく発展してきました。しかし、昔に比べると家に対するこだわりも薄くなり特徴のある住宅ではなく、規格化した住宅が増え、日本各地にあった特有の建物が衰退し特色のない住宅が増えています。工業社会・情報社会といわれている現代では、もはやかつてのように、構造の一つ一つに手間をかけ、工夫をし住宅を建てることはできません。人々は住宅に多くの時間やお金をかける余裕が無くなっているのではないのでしょうか。



佐賀県・長崎県「くど造」